
大好きだったから

ゆずか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大好きだったから

【Zコード】

Z5762A

【作者名】

ゆづか

【あらすじ】

結婚を間近に控えた、日奈子27歳。高校時代、生涯忘れられない恋愛をした。ちょっと泣けちゃう、恋愛小説。

十年前にあたし、坂井 もうすぐ鈴木日奈子は恋をした。恋愛をしたのかな。その違いは二十七歳になつた今も、わからない。両方かも。それは、まだ高校生で初めてみたいな恋で。

一歳年上の安史。安史が入学式の日、あたしに一眼惚れして、告白してくれた事から、あたし達は始まつた。付き合うつてどんな事なのか、わからないまま気付けば、スタートしていた。

手を繋いだのも、それからだいぶたつてからキスもしたのも、嬉しくてはずかしくて、でも彼と一緒にいる時間が大好きで幸せを感じてた。

なのに、あたしは母子家庭だつたから、彼の親に猛反対を受けた。彼もあたしも気にしなかつたけど。彼のお母さんはあたしはしつけがなつてないんじやないかとか、片親なんてみつともないつて言ってたみたい。

遊園地にも行つたし、あの頃は本当に幸せですつと一緒に居られるつて思つてた。

毎日、通学は一緒で授業の間、離れることすらさみしかつた。彼があたしに一眼惚れしたことから、始まつた。同じ中学だつたことは後からわかつた。安史は知つていたみたいだけど。あたしが彼と同じ高校に偶然、入学してきつと、必然に出会つたんだつて思う。幸せにラブラブに毎日、あたしは笑つてたけど、彼のお母さんはあたしの母に、執拗な嫌がらせをはじめていた。それでも、母は最初は我慢していく、でも限界がきてから、あたしに言つた。

「お願いだから、別れて。」

あたしはどうしたらいいかわからなくて、毎日、決意は変わつた。母を苦しめたくないから、悲しいけど別れよう。安史に逢えば、そんな決意は紅茶に落とした角砂糖の「ごとく、もうかつた。

高校入学と共にこの恋は始まり、一回田の夏を過ぎて、花火が散つてくみたいに終わった。

付き合い始めて、すぐに猛反対にあってたから、あたしは泣いてばつかだつた。それでも、あたしは安史を本当に失うまでは今思えば幸せだつたのかもしない。

安史があたしを愛してたから。

安史がすぐそこに居て、触ることが出来たから。

いつからか、一時しのぎにすぎないけど、母に別れたつて嘘ついて、安史に逢つてた。

委員会、バイト、部活 沢山の理由を考え、少しでも長く居られるように。

バレた時の母はもう、それはおかしくなつていた。あたしに包丁むけ、凄まじい顔をしていたつけ。

あたしは殺されるつて思つた。

なんで？悪い事なんか何にもしてない！

勉強もそれなりにはしてたし、ピアノはバイトで稼いで月謝払つてたし、むしろその辺の高校生より、よくない？

ただ安史が好きなだけでどうして？

なんで好きになる気持ちまで、誰かにあれこれ言われなきやいけないの？

なんですよ。

なんで。

あたしは何度も過呼吸になつた。

安史も同じ想いで、二人で安史の立派な、おうちに言つて訴えたり、あたしのボロアパートにも来て、母に泣きながら訴えた。そんな毎日を過ごしてた。

元旦には朝四時に待ち合わせて、寒くて暗い中、小さな近所の神社で手を合わせて、祈つた。

二人が認めてもらえますように

もつこの頃には、あたしと母はまともに会話も出来なかつた。

そして、あたし達は一回目の夏を迎えた。

あたしはおこづかいらすらもられなかつたから、夏休みは稼いでおかなきやいけなくて、バイトばかりで、夏休みのが、あたし達は逢えなくて、早く学校に行きたかった。

安史はあたしよりバイトは少なかつたから、たまにあたしが終わる時間に外で待つていてくれた。それで五分だけ話てから、帰つた。安史とあたしの家のおよそ、真ん中でいつも別れて帰つてた。その日に限つて、母がちょっと遅いあたしを疑つて、あたしは気付かなかつたけど田撃されていたらしい。

母は完璧、正氣を失い、

「何度も言つても、いまだに別れないんだね。死ぬから。」

いつの間にか瘦せた、母は手に包丁握つていた。

「わかつた！ごめん、お母さん。」

わからぬいけど、あたしは死なれでは困るから、明日別れてくることを約束した。

母もあたしも泣いてた。

いつそ、あたしは死んでもいいなつて思つてた。

もう完全に自分も未来も失いながら、最後に安史と約束して、公園で待ち合わせた。

付き合つて、三ヶ月たつた頃に初めて、キスをした公園だ。梅雨で雨降りそうな日で、ずっと何かを言おうとして、言えない安史にイライラしてたら、ふいにキスをされたんだつけ。キスをしたいって言えなかつた、安史がかわいかつたつけ。それから一週間キスしなかつたなあなんて事を思い出して、少し笑了。

安史がやって來た。

あたしのが、珍しく早く着いてた。

安史に何度も別れようなんて、決意して伝えてたから、言い慣れて

た。安史にこんなに好きなのに、なんで別れる必要があるの？つて毎回言われて、そうだよなあつて、納得してまた仲良く その繰り返しだつたな。

安史は別れを絶対考えなかつた。安史だつて、家であんなに反対されてるのに。

でも今回は、あたしはもう決意していた。

一人で母はあたしを育ててくれたのに、死なれては困る。

「安史、『ごめん。大好きだけど、もうダメだよ。』

何度も言ったような、台詞を口にしたら、涙がぽろぽろ溢れた。

安史はまたか って顔して、いつもみたいにあたしを説得してきた。でも、あたしは今回は泣いて抱きついて、元通り のいつもをするわけにはいかなくて、『『ごめん』の言葉だけ繰り返しながら、さつき歩いて来た道をまた引き返した。

「なんでだよっ 」

泣き叫ぶような、安史の言葉が背中にしみて、踵を返したい気持ちを振りきり、あたしは走つた。

めちゃめちゃ 泣いてて、地元だし誰か見てるかも 一瞬よぎつたけど、それよりも苦しくて苦しくて、胸が痛くて、頭ん中がぐっちゃぐちゃでとにかく、一人になれる、港に走つた。

小さな港は、いつものように誰もいなくて、波の音だけが聞こえて、その単調な波を見ていると、たつた今、世界一愛している人を失つた現実が押し寄せた。泣いて泣いて泣いてた。外で過呼吸になると、面倒だから、泣きたくなかったけど、コントロールの仕方がわからなかつた。

水分が全部出たかも それくらい泣いて、その顔で近くの小さなバーに初めて入つた。

まだ夕方でオープンしたばかりのようだつた。どう見ても高一のあたしなのに、大丈夫そうだつた。

赤ワインのグラスを注文した。

初めてのアルコールだつた。綺麗なルビー色は美味しい葡萄の味か

と思つてたのに、ただ泣いだけだつた。

お財布には千円札が一枚と小銭しかないはずだから、それだけしかオーダー出来なかつた。

初めて少し酔つたかもしれなかつた。

家に着くと、母にあたしは言つた。

「別れたよ。一生忘れないから。」

自分でも酷く低い声に聞こえた。

小さいアパートだから、まる聞えだけど、あたしは構わずまた泣いた。泣いた。泣いた。ご飯も食べないで、夜中になつても、朝になつても泣いてた。

残りの夏休み、一度も笑わなかつたように思つ。

バイトしか外出しなかつたし、家にいるときはぼーっとしてゐるか、泣いてた。

それしか記憶はない。

二学期になつた。

思えば、入学してから安史と通学していたから、今日から一人だつて思いながら家を出た。最寄り駅は大きいし、朝は通勤通学ラッシュだから、車両が違えば会うことはない。今までと同じ電車の今までからずつと離れた車両に乗り込んだ。

安史とはあつと言つ間に着いてしまう、いくつか先の駅が、遠いことを初めて知つた。電車を降りて、改札出た時、

「田奈子！」

いつもの声があたしを呼び止めた。

振り返る前に涙がまた溢れて困つた。

「田奈子、おはよう。」

安史は今までみた이나、くしゃつてなるあたしが好きになつた笑顔だつた。

あたしはただ安史を見つめて、涙をぬぐつて走るしかなかつた。

気付けば学校とは反対の場所で、過呼吸になつてた。

慣れてる。だから自分でおもめるのを待つた。

私は、今、フランス料理店で勤めている。家にはお金なかつたから、進学しないで、この店で働きはじめた。さすがに勤続10年近くなる私は黒服に身を包んでいる。

サブマネージャーをしている。

もうすぐ結婚することになつていて。

一生、こんなに優しくて温かい人には出会えないと思つたから、結婚を決めた。

幸せだ。来月から、婚約者の恭と暮らすから、荷物を少しずつ運び出している。

片付けが苦手で、忘れてた本や写真、CDが出てくる度に中断になつて、いつまでも片付かない。

誰に似たんだろ。お母さんだよなあ。
ちょっと他責にしたりする。

「あ」

角の折れた、それを拾つてみたら、それは懐かしい私が、安史に肩を抱かれて笑つていた。

涙がとまらなくなる。写真に溢れる。拭つ。また溢れて、私は十年前のその日にタイムスリップした。

思い出さなかつた。

あの日から、何人か付き合つたりもしたけど、安史との約一年半は空白みたいに思い出さなかつた。思い出さないようにしていった。噂で聞いたことがある。安史はあの高校で教師をしていくつて。何でも頼み込んだって噂を五年くらい前に聞いた。
流して聞いたことだし、わからないけど、もうあたしは運転席でエンジンをかけていた。

懐かしい、高校に着いた。いるかどうかもわからないのに、なにせ

つてんだろ、あたし。

そもそも何と言つて、学校に入れればいいの？

高校は変わつてなくて、なるべく高校生に見つかることによつことに入?した。

ジロジロ見られたけど、もうあと戻り出来ない。

いた。

変わつてしまつてゐるけど、安史に違ひない。ゆつくり、生徒か先生か誰かに見せてる、あの笑顔に近づく。こつちを一瞬見た。

気付かなかいよね、さすがに。

また話してゐる誰かの方に笑顔を向けた。
と思つた時、

「なんで。なんで？」

安史は話をやめて、こつちに向かつて、歩き出した。

あたしは精一杯の努力で笑つて見せて、

「たまたま近く通つて、懐かしくて。入つちゃつた！」

そう言つた時に、安史の左手の指輪に気付いた。

「そつか。久しぶりだな。俺は今、二人の姫のお父ちゃんなんだ。
日向子は？」

先に安史から事実を聞かされた。

三十近いし、おかしくはないのに、やつぱりショックで、早く帰ら
なきやと思った。

「あたしは仕事ばっかでさーもつすぐやつと結婚するの。「めん、
仕事中なのにな！」

チャイムが鳴つたから、あたしはそう言つて懐かしい学校の階段を
駆け降りた。

昔はチャイムが鳴つたら、時にはいつそりチュウして教室に戻つた
つけ。

涙があふれて、あまりスピード出せないでアクセル踏んだ。

時は人の気持ちをかえるんだ。

あたしだって、他にも恋したし、祟を今誰よりも愛してる。

過去に縛られて、人は生きていけない。

愛情は変化する。

知つてたのに、あたしもそうなのに、切なくなつた。

あの時の痛みがまた、うつてこみあげる。これで清算なんだ。

逢う約束もないまま別れた。きっと、これが最後なんだろうな。

そう思つた。

ありがとう。

ごめんね。

安史、安史、安史。

口に出してみる。

でももうその名前を呼ぶことはないだろうな。

今日だけは切なくいさせて。泣かせて。

部屋で写真を手に泣いてた。涙と一緒に、清算出来た気がした。

大好きだった。

大好きだった。

本当に大好きだった。

今は別々に幸せを見つけられて良かつた。

大好きだった。

(後書き)

読んで頂き、ありがとうございます！
こちらはほんの少し、私のホントのお話です。懐かしい人の事を思
い出したりしませんか？！過去の中では生きれないから、現実をち
ゃんと見つめなくちゃ、自分にも言い聞かせます。このあとのス
トーリー、続編予定します！
ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5762a/>

大好きだったから

2010年10月28日02時42分発行